様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４６３５４３

研究課題名（和文）トランスディシプリナリアプローチによる看護師と薬剤師の在宅医療連携システムの構築

研究課題名（英文）Construction of home medical cooperation system of nurse and pharmacist by transdisciplinary approach

研究代表者
定村　美紀子（Sadamura, Mikiko）

帝京科学大学・医療科学部・准教授

研究者番号：４０３２１３０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムを構築することが課題となっている。特に、在宅支援において、医療的ケアの必要性が高まっており、認知症や独居高齢者などへの支援が求められている。在宅において医療の中心的な担い手となる看護師と薬剤師が互いの強みを生かし情報共有を図り職種や立場を越えて連携することが利用者主体の地域包括ケアシステムの実現につながると考えられた。

研究成果の概要（英文）：Life, medical care, nursing care, prevention · so that you can continue your own life to the end of your life in a familiar area even if you become a severely in need of nursing care in 2025 when the baby-boomer generation is over 75 years old. It is a challenge to construct a regional comprehensive care system in which life support is integrally provided. Especially at home support, the necessity of medical care is increasing, and support for dementia and elderly living alone is required. It was thought that nurses and pharmacists, who are the main players of medical care at home, utilize each other's strengths to promote information sharing and collaborate across positions and standings to realize a user-centered regional inclusive care system .

研究分野：地域看護学

キーワード：ヘルスプロモーション　看護師　薬剤師　地域連携　多職種連携　地域包括ケア　地域看護学

１．研究開始当初の背景

高齢化が進行するわが国では医療や介護を含む生活全般に対する支援体制を整える必要性が高まっている。2000 年から導入された介護保険制度では、要介護サービスや予防及び日常生活支援施策と医療及び居住に関する施策との有機的な連携を図りつつ包括的に推進する地域包括ケアシステムの構築に努めなければならないとされている。国民の 4 人に一人が 75 歳以上となる 2025 年を見据え一人ひとりの国民が病気や障害を自ら予防し要介護状態にならないように自立した生活を送ることが期待されている。これは、WHO が提唱するヘルスプロモーション（人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし改善できるように働きかけるプロセス）を推進することであり、医療や介護サービスに予防の概念を取り入れ多職種が連携した支援を行うことが課題となっている。しかし、病院などの医療施設ではチーム医療として職種間連携は実施されているが、在宅サービスを提供する多職種間による連携については十分な研究が行われていなかった。そこで、住み慣れた地域で医療や介護が受けられる環境を整備するため、在宅において医療の中心的な担い手となる看護師と薬剤師の連携に着目し本研究に取り組んだ。（図 1）（図 2）

２．研究の目的

本研究の目的は住み慣れた地域で暮らし続けるために看護師と薬剤師が連携できるシステムを整えることで、患者が在宅における薬剤管理を主体的に行える環境を整えることである。

３．研究の方法

平成 26 年：前年度に薬剤師を対象として実施したアンケート調査を分析し訪問薬剤管理指導の実態を明らかにした。調査の結果をもとに在宅医療における看護師と薬剤師の協働のあり方について話し合うため訪問活動を行う薬剤師と訪問看護活動の経験のある看護師で事例検討会を行った。

平成 27～28 年：看護師と薬剤師の顔の見える関係づくりを促進するため地域包括ケアに携わる多職種や一般住民を巻き込みながらワールドカフェやファシリテーション研修などを企画し、PDCA サイクルにもとづくヘルスプロモーション活動の実践を行った。

1）ワールドカフェの実施

目的：在宅療養者に対する服薬支援において医療や看護、介護、リハビリ、福祉に携わる者がお互いの役割や価値観、ケアに対する考え方を知る。対象：一般住民、薬局関係者、地域の保健医療福祉関係者等、テーマ「住み慣れた自宅で暮らし続けるための地域包括ケアとは～健康寿命を延ばすためにお薬との上手な付き合い方～」参加人数：29 名

2）研修会の実施

多様な背景をもつ人々と効果的な話し合いを行うスキルを学ぶ研修会を以下のように実施した。目的：多様な価値観や問題意識をもつ人々のモチベーションを高め多職種連携活動をスムーズに行うための実践的な技術を身に付ける。対象：看護職、薬局関係者、地域包括支援センター職員、在宅ケアに携わる介護福祉関係者等、テーマ「地域包括ケアの現場で活かすファシリテーションスキルを学ぶ」、参加人数：23 名

多職種連携について互いの思いを理解し顔の見える関係をつくるための「対話の場」となるように以下を実施した。目的：身近な地域で医療や介護に携わる人たちが在宅における服薬支援について話し合い、お互いを理解することで多職種連携のきっかけをつくる。対象：医師会、歯科医師会、薬剤師会、訪問看護ステーション、介護保険事業所、地域包括支援センター関係者等、テーマ「医療と介護の連携を促すために多職種でつくる『対話の場』～在宅における服薬支援について」、参加人数：37 名

平成 29 年：これまでの取り組みで培ったネットワークを活用し多様な専門性をもつ専門職と連携しながら地域住民を巻き込んで認知症予防や健康づくりを啓発する健康フェスタを企画した。

目的：多職種が所属や役割を超えて協働し地域住民と交流しながら地域包括ケアを推進する。対象：保健医療福祉教育関係者及び一般住民、テーマ「健康フェスタ in せんじゅ」、参加人数：112 名

４．研究成果

本研究は、看護師と薬剤師の連携を強化し在宅における服薬支援体制を整えることで在宅療養者が主体的に薬剤管理を行う環境をつくることである。そこで、平成 26 年度

は、調剤薬局の薬剤師に実施した調査結果をもとに看護師と薬剤師による事例検討会を行った。具体的な事例を通して話し合うことで看護師や薬剤師の専門性について理解を深めることができた。処方箋と患者自身の訴えから服薬状況を把握する薬剤師にとってお薬手帳は重要な情報源であり、災害時などに迅速に薬剤を提供するための資料となる。看護師は、服薬する場面や身体の変化を観察することができ患者の生活状況を把握している。在宅療養者の中に認知症や独居の高齢者が増加する中で訪問看護師が薬剤師と連携し情報共有できる働きかけが必要である。

平成 27～28 年度は、看護師と薬剤師を中心として地域包括ケアに携わる多職種が出会う場づくりやコミュニケーションスキルを向上するために研修会を実施した。一般の人々はどのような思いで薬を服用し薬局を利用しているかなどを地域包括ケアに関わる専門職が地域住民と和やかな雰囲気の中で話し合い服薬支援の課題や日々の活動を振り返ることができた。業務について話し合う機会をつくることや物理的な場づくりも必要であるが、立場が異なる者どうし活動の基本となる姿勢や態度、価値観など専門性を理解しながら話し合い合意形成するプロセスが大切である。在宅療養患者を支える、薬剤師や看護師、介護関係者を対象に専門家の指導のもとで、コミュニケーションスキルを向上させるためファシリテーション技術を学ぶ研修会を開催した。参加者が地域包括ケアに対しどのようなイメージを抱いているかを漢字１文字で表すワークに取り組み「結」、「生」、「和」が発表された。多職種で構成したグループメンバーと１文字を決定するまでのプロセスを通して多様な背景や価値観をもつ人々が合意形成していくことの難しさや、他者の意見に耳を傾け、効果的に自分の気持ちや考えを伝えながら話し合うプロセスが大切であることを実感するワークとなった。多職種で服薬支援など連携を行う時の課題については服薬支援において職種間で意識の違いがあると思われた。

多職種連携について互いの思いを理解し顔の見える関係をつくる「対話の場」実施後のアンケート結果をもとに活動内容や方法から『待ち型』『訪問型』に分類して以下にまとめた。服薬支援に関する職種間の意識の違いでは、医師や薬剤師からなる『待ち型』は、訪問看護師や介護職による『訪問型』に比べて患者が利用する医療・介護サービスの内容を把握する項目が有意に低い結果となった。これは、医師や薬剤師などの医療職は、病気や障害の経過を重視し医学モデルで対象をとらえるため身体面の変化や病気の症状などは把握しやすいが、本人からの訴えがなければ生活面の問題や介護や他科受診に関する情報を把握することが困難となるからだと考えられた。一方、看護師や介護職は治療効果や有害作用を日常生活の変化から捉えることができると考えられた。専門性やアプローチの方法が異なる者が情報を共有し患者本人や介護者、他職種に薬剤の効果や考えられる副作用を伝えるなど多面的に対象の状況をとらえて一元的に情報を集約し多職種で医療及び生活面の問題を共有することが在宅における服薬支援で重要であると考えられた。服薬支援連携の課題では、サービスの進行状況や結果の報告、協力要請ができているという認識が全体の中で高得点であった。これは、研修会の参加者が在宅支援に携わる専門職がほとんどで日常的に様々な場面で、関係者と協働し業務を行っているためだと考える。一方では、連携において障害と感じることとして、「病院の敷居の高さ」、「医療に対する苦手意識」、「遠慮や感情の障壁」「精神疾患高齢者の医療導入」という意見があり、互いの役割や専門性を理解することを困難だと感じていた。組織や職種を越えた多職種連携活動を促進するためには、利用者の情報だけでなく担当者との関係性を築き協働を促す情報も必要になってくる。多職種連携を強化するためには、日常の業務について気軽に話し合える関係性をつくることが課題であり価値観や考え方を伝え合う「対話の場」づくりが必要である。

ヘルスプロモーションの理念にのっとり地域において意図的・計画的な専門職種間の役割横断的共有（トランスディシプリナリアプローチ）が求められている背景について明らかにすることができた。看護師と薬剤師がそれぞれの専門性を生かして在宅における服薬支援等の場面で分野横断的に連携することが地域包括ケアシステムの構築において重要である。

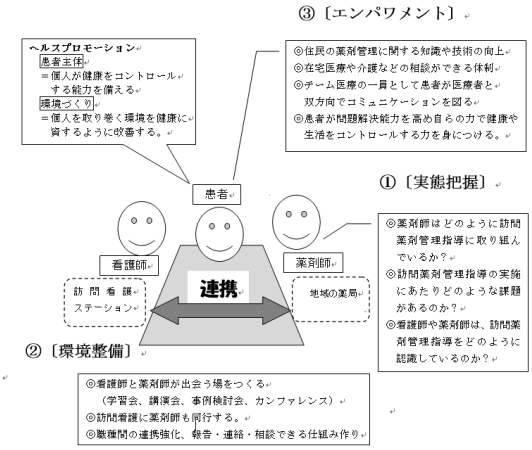

図 1.本研究の全体像

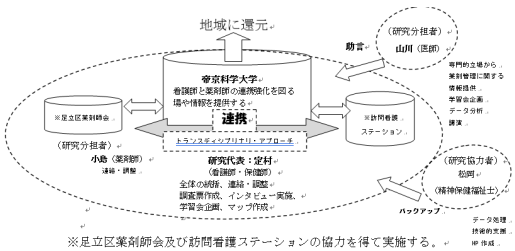

図 2.研究体制

５．主な発表論文等

[雑誌論文]（計 4 件）

①定村美紀子,大西奈保子,森實詩乃：第 18 回 East Asia Forum of Nursing Scholars (EAFONS)に参加して,帝京科学大学紀要，第 11 巻，179-182，2015

②定村美紀子，糸井和佳,佐藤亜月子：「健康寿命を延伸させるためにお薬との上手な付き合い方」をテーマに実施したワールドカフェの取り組みについて：帝京科学大学紀要 第 13 巻：221-226,2017

③定村美紀子,糸井和佳,松岡恵子,浅見恭史,霜越千裕：地域包括ケアシステムにおける多職種連携による服薬支援の課題,帝京科学大学紀要 第 14 巻，209-213，2018

④定村美紀子,糸井和佳ほか：地域包括ケア推進を目指し多職種で取り組んだ「健康フェスタ in せんじゅ」、地域連携研究　帝京科学大学地域連携推進センター年報　第 2 巻

[学会発表]（計 4 件）

①定村美紀子,山川百合子ほか：在宅訪問薬剤管理指導の現状と課題：プライマリ・ケアにおいて薬剤師に求められていること、第 5 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会,2014 年 5 月 10-11 日（岡山市）

②定村美紀子,大西奈保子,山川百合子ほか Transdisciplinary Collaboration in Home Health Care with a Pharmacist as a Team Member、18th East Asian Forum of Nursing Scholars ,2015 年 2 月 5-6 日（台北市）

③定村美紀子,糸井和佳,佐藤亜月子,浅見恭史,霜越千裕：多職種連携による訪問薬剤管理に関する学習会の取り組み,第 6 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、2015 年 6 月 13-14 日（つくば市）

④定村美紀子,糸井和佳,霜越千裕：地域包括ケアシステム実現に向けて”ファシリテーションスキルを学ぶ,“第 8 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、2017 年 5 月 13-14 日(高松市)

６．研究組織

（1）研究代表者

定村美紀子（SADAMURA　MIKIKO）
帝京科学大学・医療科学部・准教授
研究者番号（40321301）

（2）研究分担者

山川百合子（YAMAKAWA　YURIKO）
茨城県立医療大学・保健医療学部・教授
研究者番号（40381420）

小島　尚（KOJIMA　TAKASHI）
帝京科学大学・医療科学部・教授
研究者番号（50205382）

大西奈保子（ONISHI　NAOKO）
帝京科学大学・医療科学部・准教授
研究者番号　（60438538）

佐藤亜月子（SATO　ATSUKO）
帝京科学大学・医療科学部・准教授
研究者番号（40433669）

糸井和佳（ITOI　WAKA）
帝京科学大学・医療科学部・准教授
研究者番号（30453658）